

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02629

研究課題名(和文) 日本語・イタリア語における他言語との接触と音韻構造に関する実証的研究

研究課題名(英文) Research on contact with other languages and phonological structure in Japanese and Italian

研究代表者

田中 真一 (Tanaka, Shin'ichi)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10331034

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本語とイタリア語における借用語の分析、および、各言語を母語とする話者によるL2音声の知覚・生成のパターンを対照することを通して、両言語間における種々の音声・音韻現象に関する新たな知見を提示した。また、両言語と異なるアクセントタイプに属する言語との間で、パターンの異同を分析・対照し、借用語音韻論におけるL1とL2の役割を明らかにした。

さらに、イタリア語から日本語に借用された語における二重子音、長母音、アクセント(強勢)の三者を、最適性理論(Optimality Theory: OT)の枠組みにより同時に分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

質・量ともに不十分であるイタリア語と日本語との間における、借用語受け入れについて対照研究を行い、言語学(音韻論)の分野に記述的一般化による新たな知見を提供するという面で、学術的・社会的意義がある。また、上記の記述的な成果から理論的分析を行い、理論言語学(音韻論)に新たな知見を提供している。

さらには、得られた成果の一部を、音声学・言語学(音韻論)・言語教育の教材として提供するという面において、本研究は社会的な意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：Through the analysis of loan words in Japanese and Italian, and contrasting the patterns of speech perception and production by speakers of each language, new findings on various speech and phonological phenomena between both languages were presented. In addition, we analyzed and contrasted the pattern differences between both languages and languages belonging to different accent types, and clarified the roles of L1 and L2 in loanword phonology.

In addition, we analyzed the geminate consonants, the long vowels and the accent (stress) in the words borrowed from Italian to Japanese, using the framework of Optimality Theory (OT).

研究分野：言語学

キーワード：借用語音韻論 イタリア語 音声知覚 長母音 コーパス調査 最適性理論 音節構造 強勢

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の借用語音韻論では、関係する二言語のうち片方が英語であるケースが大半である。また、イタリア語と日本語が関わる音韻現象は、おもにイタリア語二重子音をどのように日本語が受け入れるかに関するものであり、イタリア語受け入れ一つの例にしても、研究は質、量ともに不十分である。また、イタリア語の新しい言語事実については国内でほとんど扱われておらず、したがって、イタリア語と日本語との関係（とくに新語）について述べられた研究は、その言語学的重要性に比して、皆無に近いと言ってよい。

2. 研究の目的

本研究ではこのような背景を踏まえ、日本語、イタリア語の借用語および、それぞれの母語話者(L1)の非母語音声(L2)知覚を通して、より俯瞰した立場から音韻現象を整理し、新たな知見を提示することを目的とする。

3. 研究の方法

コーパス調査により、各言語の借用語例を抽出し、L1とL2の情報を整理しながら、受け入れのパターンを分析する。また、各母語話者に対するL2知覚調査を実施し分析するとともに、上記で得られた借用語の音韻変換パターンとの異同を観察する。

これらの結果を対照するとともに、受け入れの異同の方策を、最適性理論の枠組みによって分析する。

4. 研究成果

おもに以下の6点について明らかにした。

(1) まず、イタリア語から日本語に借用された語の強勢と音節構造(母音長・子音長)との関わりについて調査・分析を行った。日本語母語話者は、基本的に原語の二重子音と長母音をとともに高い割合で知覚できる一方で、借用語にするレベルでは二重子音化と長母音化が、日本語側の音韻構造によって阻止されることを明らかにした。

(2) 借用語における音節構造とアクセント構造(強勢、ピッチアクセント、声調)の受け入れの関係について、とくに異なるアクセントタイプに属する言語間(英語→日本語、日本語→英語、イタリア語→日本語、日本語→イタリア語、日本語→台湾閩南語)でパターンの対照を行った。

その結果、いずれの受け入れパターンにおいても、L1(そして部分的にL2)の音節量を反映したアクセント要素の受け入れが行われることが確認できた。具体的には、各言語において、強勢音節とピッチアクセントと高トーンは、それぞれ受け入れにおいて対応し、そのことと同時に、より重い音節に対して「強勢」「ピッチアクセント」「高トーン」それぞれの要素が対応しやすいということが明らかになった。

(3) イタリア語由来の日本語借用語における、原語長母音と二重子音の受け入れに非対称性の生じるメカニズムについて、最適性理論にもとづく分析を提示した。

イタリア語由来の長母音は、原語の強勢開音節が日本語化される際、長音()として借用されること、また、もう一つの特異モーラである、促音(ッ)の受け入れ方法との間に、間接的に強勢が関わるという意味で共通性が見られることを明らかにした。

また、イタリア語の長母音が日本語に短母音として受け入れられる原語強勢以外の条件として、①とくに語末位置の /l'a/、/u'a/ といった、前半部に強勢を伴う上昇二重母音であること (trattori':a (trattoria) → トラット'リア)、②長母音を受け入れないことで、日本語側の平板アクセントを実現するもの (okari':na (ocarina) → オカリナ) の2点が主なものであることが明らかになった。

また、強勢を持つ語同士の長母音受け入れの位置の非対称性については、日本語の借用語アクセント規則一般から (そこに母音長受け入れのシステムを組み入れることで) 矛盾なく説明できることを新たに提示した。具体的には、語末から遠い位置の長母音はフット形成位置が語末から離れる (理論的には、Align-Rの違反の程度が大きくなる) ため受け入れられず、短母音として受け入れる (理論的には、Align-Rの違反の程度を小さくする) ことで語末に使づけるという方策が働くことを示し、記述的一般化と理論的一般化との間に整合性を示した。

(4) これまで分析してきたイタリア語から日本語に借用される二重子音と長母音、さらには、アクセントの三者を、最適性理論 (Optimality Theory: OT) に基づき同時に計算する分析を試みた。二重子音と長母音とが、一方では共通の、他方では非対称的な受け入れられ方をすることが明らかになった。具体的には、語末付近ではそれ以外の位置と比べ相対的に両者が受け入れられやすいという点では共通し、非対称性については、二重子音では生起位置よりも子音の種類の方が受け入れに大きく関係するのに対し、長母音では、生起位置がもっとも関係することが明らかになった。

(5) 他の音韻現象としては、イタリア語における (声援、数え歌、スローガン等の) Text settings のデータ収集を開始するとともに、すでにデータの蓄積のある、日本語における Text settings (野球声援、数え歌など) のパターンと対照させるとともに、両言語に入った相手言語からの歌謡における歌詞の音符付与パターンの調査を開始した。

(6) 今後の研究への橋渡しとして、他言語における外国語音声の知覚・生成について、とくに音節構造との関係を分析した。とくに、韓国語を母語とする日本語学習者の長母音と二重子音、撥音の受け入れについて、コーパスに基づく調査および分析を遂行した。国立国語研究所の C-JAS というコーパスを用い、韓国語を母語とする学習者は、日本語のリズムを正しく発音する場合とできない場合とで、音節配列による非対称性が見られることを明らかにした。具体的には、「コート」「さっか (作家)」のような HL (H: 重音節、L: 軽音節) の音節構造は、正しく処理されやすいのに対し、「ほりゅー (保留)」「ぎろん (議論)」のような LH の音節構造は、相対的に間違いが多いこと、また、それらの結果、出力形において、韓国語母語話者は極端に HL 型を産出し、LH 型を忌避することが明らかになった。それらのことは、L2 の日本語の無標と有標の音節配列が過剰に適用された結果であるという解釈を施した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 田中真一	4. 巻 -
2. 論文標題 特殊モーラ階層の二面性：外来語アクセントにおける位置算定と音節量決定	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語におけるインターフェイス	6. 最初と最後の頁 58-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Ito Junko, Kubozono Haruo, Mester Armin, Tanaka Shin'ichi	4. 巻 7
2. 論文標題 Kattobase: The linguistic structure of Japanese baseball chants	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the Annual Meetings on Phonology	6. 最初と最後の頁 電子版
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.3765/amp.v7i0.4470	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Tanaka Shin'ichi	4. 巻 -
2. 論文標題 The relation between L2 perception and L1 phonology in Japanese loanwords	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The Phonetics and Phonology of geminate consonants (Oxford University Press)	6. 最初と最後の頁 321 - 339
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oso/9780198754930.003.0014	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 田中真一	4. 巻 29
2. 論文標題 「ダイヤモンド」と「コンクリート」のアクセント：大阪方言における外来語の音調変化と言語構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代言語理論の最前線	6. 最初と最後の頁 128-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中真一	4. 巻 11
2. 論文標題 母音長受け入れの非対称性とAlignment 制約：最適性理論にもとづくイタリア語由来の借用語の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 神戸言語学論叢	6. 最初と最後の頁 75 - 86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中真一	4. 巻 -
2. 論文標題 イタリア語における日本語由来の借用語と韻律構造	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 現代音韻論の動向: 日本音韻論学会の歩みと展望	6. 最初と最後の頁 84-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中真一	4. 巻 -
2. 論文標題 パドヴァとヴェローナの韻律構造：イタリア語由来の借用語における音節量・強勢の受入と音韻構造	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音韻研究の新展開：窪園晴夫教授還暦記念論文集	6. 最初と最後の頁 345-349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) -	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Shin'ichi Tanaka	4. 巻 -
2. 論文標題 Phonological structure and loanword adaptation: a case study from Japanese	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Kobe University Academic Research and Education Forum 2016, Research Paper	6. 最初と最後の頁 58-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) -	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計14件（うち招待講演 6件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 名古屋方言における疑問文の音調と言語構造
3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa 4 (国立国語研究所)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 李多慧・田中真一
2. 発表標題 韓国語母語話者の日本語発話におけるリズムの誤用と生起環境：C-JASを用いた分析
3. 学会等名 関西音韻論研究会 (PAIK)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 氏平明・田中真一
2. 発表標題 非流暢性発話の生起とアクセントとの関係：愛知・岐阜方言話者を対象として
3. 学会等名 関西音韻論研究会 (PAIK)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroaki Nagatomi and Shin'ichi Tanaka
2. 発表標題 Word Formation and Accentuation of English Suffixes in Japanese
3. 学会等名 ICPP 2018 (International Conference on Phonetics and Phonology) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 借用語音韻論と韻律構造: 日・英・伊語間の対照
3. 学会等名 東京音韻論研究会 (TCP) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 イタリア語由来の借用語における重音節受入の非対称性とアクセント計算
3. 学会等名 関西音韻論研究会 (PAIK)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 大阪方言における外来語アクセントと言語構造
3. 学会等名 関西音韻論研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 詩・歌 リズムと言語学
3. 学会等名 神戸大学文学部公開講座 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 イタリア語由来の借用語における 母音長受け入れと位置の非対称性
3. 学会等名 日本語学会(第153回)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 日本語・イタリア語の借用語における韻律構造の受け入れ
3. 学会等名 関西音韻論研究会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Shin'ichi Tanaka
2. 発表標題 Phonological structure and loanword adaptation: a case study from Japanese
3. 学会等名 Kobe University Academic Research and Education Forum 2016 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 日本語諸方言のアクセント法則と言語構造
3. 学会等名 活水女子大学公開講座(招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 日本語音声の法則とその教育
3. 学会等名 MACC夏季研修大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 田中真一
2. 発表標題 日本語音声の法則とその教育
3. 学会等名 MACC夏季研修大会（招待講演）
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 西原哲雄、都田青子、中村浩一郎、米倉よう子、田中真一	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 言語におけるインターフェイス	

1. 著者名 西原 哲雄、田中 真一、早瀬 尚子、小野 隆啓	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304
3. 書名 現代言語理論の最前線	

1. 著者名 田中真一、ピンテール=ガーボル、小川 晋史、儀利古 幹雄、竹安 大	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 400
3. 書名 音韻研究の新展開	

1. 著者名 Kubozono, Haruo (ed.)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 408
3. 書名 The Phonetics and Phonology of Geminate Consonants	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----